

# 虚の符

洪水企画 2013.4.20

ソラ  
イカダ

http://www.kozui.net

## 空夢売捌人

### 海埜今日子

ふるいれんじょうがもちこされた。いつかい、ふたたび、あさのこたえが、ねしなにおどる。さら、きらめいて、ほしは、つぼといわないの？ ゆめうるろうじんが、ひきずるあし。そのぶんだけ、あたたかいねえ。かどをわたってみせます。おやまとおとくに、つきがほそい。す。おじいさん、きつと、であってくださいねえ。

ささやくねごと、いやいやする、いちまい、ふたつき、きつともきれない、あいぞうです。だんげんし、ばらまいて、みあげたよるに、ひつけ、とどけ。まもなくあかつきをとりまします。かimotoめたなら、さびしいですか。きつと、まぎれて、ちらめくおもいで、ほら、みつけ。くちさきばかり、ようしやなくつて、やまにのこした、おほしさま、きつと、ふたりで、ひとつを、なくす。ちがうゆめなら、おなじように、ごぼせばいいさ。したたつて、ひるのむくろに、ああ、つれだつてゆくのでしようか。あしあとの、かたちこしい、みだれるこえだ。

おやまのはしが、そらをおおつて、しまいになる。そんな、きつさきを、あつめればいい。いちどめなら、こいですが、おじいさん。うりかたをどうぞ、にどめですが、おしえてね。どこでかんじよを、こしらえよう？ むくちになる、やさしさつかんで、みたたび、かいたい。

くいをのこす、さんじょうです。つきので、まがり、よるのみせを、みつけたかたの？ とむらうばしよなら、ひとときです。ほしは、くずではなかつたね。おてあげですか、いえ、さびしさをかたてに、ちつとも、ねむくなんか。ふたつ、まなざし、からめて、ほい。

つたないしんじょうも、ごぼれます。ひびを、こえに、ひとばんあかして、のせましよう。ほしは、ふつたりなんか、いえ、つるから、やまのはし、つもつてね。ゆめうるろうじんが、さすつたうでが、ひそめたおもいに、ささやくこいだ。つきもかけるよ、ふたたび、きてね。

ねものがたりが、うれません。なら、ゆめのかへい、あいじょうこめて、かぞえましょう。みせはちつとも、いちまい、ふたり、たまに、やりきれないよ、おじいさん。かこを、わらつて、つきをもとで、ほしのつぼ。のこえ、やまこえ、ほそく、まんまる、そら、あたらしい。

## コーヒー

### 平井達也

自分ひとりのためだけになんて  
コーヒーを淹れたりしない  
眼気をほらつて  
カレンダーをめくる意味を探すには  
煙草でいい

誰に見せるわけでもないから  
部屋着の滲みもかまひはしない  
こぼしてしまつたのは  
まだあたたかさを残して  
揺れていたさようなら だつたけれど  
ひとりで飲むなら缶コーヒーでいい  
空き缶を部屋の隅に転がすと  
小さな追憶にぶつかつて  
不恰好な音を立てた

## 夜光航

### 森山 恵

鉛筆を強く握り  
文字を書く  
六角形の木片の中で丸い芯はじつと息を詰め  
行く先もわからないまっ動いて  
細かな文字でノートを埋める  
ひと文字ひと文字  
一行一行  
紙の上に息を放つ

鉛筆の黒い芯は知らない  
その暗さが動く時  
灯台の光が沖へと伸びること  
黒い雲が生まれることを  
もうひと文字  
記憶の岩場に  
夜光貝が貼りつくように書きつける  
ひとりぼっちの貝殻  
夜光貝  
だれも——知らない

襲いくる風

鉛色の波が逆巻き荒れ騒ぎ  
真夜中の雨と風が岩をしように乱打する  
雷鳴が芯を砕く

「雨、よ降れ」「風、「よ吹け！」激しい叫び

灯台の光がかき消され  
鉛筆の芯が  
折れる

「雨、「よ！」  
海の匂いと細かな粉を吐いて  
「瓦礫となつて  
折れる

岩はのみ込まれ

夜光貝ごと海の底に沈んでいく  
階段 言葉の天を突き抜け  
鉛筆は折れながら

「たけ、り狂う！狂「うがいい！」

もうひと文字  
を岩に  
刻む

海底に沈んで光る最後のひと文字を

## 小麦を送る

### 神泉 薫

小麦を送る ローマへ  
痕つかずの桶を持ち帰るために  
シエイクスピアの戯曲の中 ボンベイの台詞は  
ひとときの 希望を 胸に燃え上がらせる  
人生の取引が成立する 紙の上のことは沃野  
耕す鋤は 人の 目覚めた精神だろうが  
朝霧の中 膝元で聞く 戦火の勃発には 効き目がないうだ  
魂を削つて 幾千年もの歴史を潜り抜けた にもかわらず  
レーテ川を渡れば、まっさらな忘却にさらされて  
軍旗はためく、イオニアの荒野を 再び  
盲いた魂をざりざりと引きずつて  
びゅうーびゅうー びゅうー  
さすらう者が 絶えない

## 仮面の湖

### 小島きみ子

名前とその意味のことは、解答を求めたりはしてはならないのだと思つた。  
風も樹木も、その名前を知らないずつと前から出会つていたのだし、  
知つているということは、幼年時代から現在までの「記憶による連合」によって、  
喚起される感受性だつたからだ。

たゆたう湖の聖なる水鏡。  
割がれ落ちる表層の上に付加される仮想の仮面をもつて、  
変革していく私という人格の人格。  
空だけが知つている空。  
私は木に変身することだつてできる。

けれど、翻す光自身は色彩言語の意味を知っているのだろうか。  
神はほんとうに「光、あれ」と言つたのだろうか。  
神もまた人のベルソナの下にその仮面を隠したのではないのか。  
人とともに在るために。

木を映す湖の冷やかな水面には、  
空の青さも、雲のかたちも、  
私というものの姿も、

私が見ているように彼らに見えているわけではなかつたが、  
彼らのなかに私は混ざつていたし、  
私は彼らのなかに溶けていた。

水の鏡に映される、それぞれの仮面のベルソナと呼ばれる人稱。空は水の中に  
（青）という光を隠している。雲は湖のうえにその形を歪ませている。  
木は私というものを映す。私は無情のものを映す水鏡の面の奥に、  
さらなる私を隠蔽すると同時に、水面に自我という実装の面を剥がしてゆく。

## ボトルシップ/砂時計

### 二条千河

小壘の中に帆船を浮かべるように  
砂時計の中に地球を閉じ込めて  
一日に二度ひっくり返す  
真昼から真夜へ 真夜から真昼へ  
硝子のくびれを窮屈そうにすり抜ける利那  
彼は誰と聞き 誰を彼と問うあわいがある

小壘に唇を寄せて息を吹き込めば  
遠く霧笛の音がする  
砂時計の底をつい開けてしまつたのも  
そんな悪戯心のせい  
乾いた青い砂粒は瞬くうちに舞い散つて  
あわててかき集めようとしても  
飛沫のように指の隙からこぼれていく  
地球はどれか どれが地球かと問うあわいにも  
砂粒は止めどなく時計から流れ出し  
青海原となつて宇宙へ広がつていく  
真昼から真夜へ 真夜から真昼へ  
永遠にくり返されるはずだつた往復運動は  
満ちては引く潮汐に ただ  
かすかな名残を留めるだけ

失くしたのではない  
解き放つたのだと  
吐息が小壘に転がり落ちて  
霧笛の音

出航せよ  
窮屈なボトルネックをすり抜け  
できたての海に帆を張つて  
おまえも旅立つがいい

たとえ風が吹かなくても  
權を動かし続けていれば  
いつか地球に追いつくだろう

その目までに  
どれだけの時がかかるとしても  
空ろな砂時計は  
もう昼夜を数えない

## étude 音楽 (3)

### 池田 康

ピアノ

吊橋 心の谷を走り  
階段 言葉の天を突き抜け  
十の悟空の舞踏めくを  
漆黒の闇の巨艦はうごかず  
真直にそろう鋼の神経  
毛ほどの狂いもゆるぎぬ鉄の意志は  
最高の健康かこれも狂気の類か  
宇宙を矛盾させ燃え上がらせる 一曲を祈禱する

ヴァイオリン

論理は曲げることができる  
そう知る耳が旋律を捕まえる  
論理はうたうこともできる  
そう知る手が旋律を宙に放る  
運命をはしく跳躍の百  
法則をよじる楕圓の千  
パベルを見おろす  
四次元の次の次の次元の虹

作曲家

音がきこえるから  
音でこたえる  
するとさらに音がきこ  
音音音のくさりがきこ  
文通はえんえんと続き  
追伸は意外な方向に進み  
響きの環の最果て  
逢瀬の約束がむすばれる



## 今回の執筆者

伊武トーマ=福島県福島市  
海埜今日子=東京都世田谷区  
平井達也=東京都練馬区  
森山恵=東京都豊島区  
神泉薫=神奈川県相模原市  
小島きみ子=長野県佐久市  
二条千河=北海道白老郡  
池田康=愛知県名古屋